

# 右舷灯

大阪府立大学を走り、いつことになる。日本の発電の年退職した後、大阪多くが化石燃料を燃やして電気経済法科大学で教養科目をいくつか教えるようにになった。それが起きており、それを使って電気自動車が走ることには想像の1つがエネルギーとハイブリッドカーの効率を比較させて、どちらの車が環境に良いかを考えさせる。さらに温系の学生を対象とした授業なので、工学部時代のような数式を使つた説明はなくして、科学技術・工学の大事なポイントをわかり易く教えることを心がけている。

## ちまたの常識を疑え

そこで学生たちと議論していく環境問題の違いも認識させて、驚かされることが、マスクをはじめてどのような車がよいか等が流す間違った科学知識をそが決まってくることを理解していく。もうう。「水素を使って発電すれば電気自動車は全く排気ガスをれば水しか出ないので究極のエコだと思います」という意見に、「水素を作るエネルギーはどうするの?」と聞くと、また「え!!」。こんなやりとりをしながら、科学知識に基づくエネルギーを教えていた。

そのままで、そのまま鵜呑みにしていること。もちろん、「電気自動車は全く排気ガスを出さないで環境にいいので、学生の意見に、「電気を作るのに発電所では排気ガスができる!!」。こんなやりとりをしながら、科学知識に基づくエネルギーを教えていた。

そうした中で、興味をもつてくれるのが「ゴミ発電」である。「ゴミ発電をしている地方自治体では分別回収をやめたところもある」と説明すると、「それは違っているだけでは?」との問い合わせ。石油から作られているプラスチックのゴミは燃料と同じで、「ゴミと一緒に燃やせば、焼却時の燃料消費は少なくなり、それに発電すれば電気ができる。だからプラスチックゴミは「都市油田」とも言えることを教えると、目から鱗が落ちるような顔をする。ちまたの常識にとらわれず、科学的かつ論理的に考えることが大事なのだと教えていた。(池田良穂)